「Mangiare、Cantare、Amore」

和田　章

シシリー島に続くローマの街道、丘の上のタオルミーナの広場から見る地中海

サーツの先輩の方々はお歳を召してもお元気な方が多く、お酒も大好きでお歌もお上手、いつまでも建築少年を謳歌しておられ、見習わねばと思って毎日頑張っています。まだ若輩者ですが、男同士でも久しぶりに会うとハグするような同い年の友人がアメリカやイタリアにいます。その一人がシシリー島のカターニャ大学の先生ですが、この長いお付き合いのおかげで、イタリアに行くことが多く、知った言葉が「Mangiare（食べて）、Cantare（歌って）、Amore（愛して）、人生を謳歌するイタリア人の極意」です。

日本人ですから和食が落ち着くという方が多いと思いますが、イタリア料理のお好きな方も多いと思います。地中海に突き出す半島と島の国は日本に似ていて、新鮮なお魚に恵まれています。野菜もお肉も、チーズ、ピザ、パスタ、オリーブオイルも、レモン、ワインも美味しい国です。夕方５時にレストランに行くと「何しにきたの?」というような目で見られ、８時に行っても早すぎるくらいです。週の半ばでも夜中の１２時まで子供達も一緒になって賑やかに食事をしているのを見ます。せっかく生まれてきたのだから、美味しいものを食べてお酒を飲んで、歌って、愛さなければ損と思っているのでしょう。

世界的に流行ったイタリアの歌は、「オーソレミオ」、「アリベデルチ・ローマ」、「アモーレミオ」など沢山あります。イタリアの歌からはスカッと晴れ渡る空と森の緑、美しい海、楽しい人たちを感じます。ポルトガル・リスボンは歴史のある港で、船乗りを見送る女性たちの気持ちを歌ったファドは運命・宿命を表すそうですが、異国の我々が聞いてもその気持ちと雰囲気が感じられるので不思議です。

フランク・シナトラ（シシリー島出身）、ビング・クロスビー、ナットキングコール、ルイアームストロングは世界的ですし、女性歌手ではエラフィッシュ・ジェラルドがいて、今でも惚れ惚れして聴いています。音程の正しさでは世界一と言われ、正確に高い音に飛ぶときなど、心地よい気分になります。エルビス・プレスリーも最高です。グレンミラー、ベニーグッドマンのスイングジャズなどから２０世紀に強かったアメリカの時代を感じます。トランプ大統領がこの時代を復活しようとする気持ちが良く分かります。

江戸時代に遡りますが、日本の民謡や芸術から日本の強さを感じることがあります。行き過ぎた戦争に負けて作られた平和憲法は大事だと思っています。ただ戦後に日本人の強さが響くような音楽がなくなったのは寂しいことです。民謡を歌っていると、血が騒いでくるのは否めません。良い意味で日本人は世界に出て行かねばならないと思っています。

音楽も建築もその時代の影響を受け、何十年も何百年も過ぎてからその時代を正しく伝えてきます。戦前の左右対称の堂々とした公共建築に比べ最近の開放的な市役所などを見てその変化を感じます。明治になって西洋建築を学び、日本のものにしてきた先輩らが多くおられますが、同じ頃に海外の音楽に学び、日本に西洋音楽を広めてきた先輩も沢山おります。この時代にはアメリカ航路があり、豪華客船には音楽奏者がいてサンフランシスコなどからアメリカの新しい音楽を持ってきました。クラシック音楽は真面目な家庭に育った子供たち、ジャズやその後のロックンロールは、少し不真面目な少年が飛びついたように思います。

不良少年ではありませんでしたが、学生時代にデキシーランド・ジャズのバンドでベースを弾いていました。同じ頃、フォークソングも大流行りで、トリオの一員としてベースを弾いていました。テレビに出たり、大隈講堂でコンサートをしたり、楽しい思い出です。ボブ・ディランの「風に吹かれて」、「花はどこに行ったの」。ジョンバエズの「ウイーシャルオーバーカム」など、若者たちはもっと平和で自由な世界を作ろうと、大きなうねりの中にいました。早稲田大学の授業料値上げから始まった学生運動など、日本の若者は元気だったと思います。ただ、戦後の日本にも今の時代にも良い音楽が沢山あります。建築家も世界で活躍するようになりました。次に続く人たちに期待します。

定年間際に東京工業大学すずかけ台キャンパスの研究棟の耐震改修設計を行いました。幅が４m強、高さが４０m強の厚さ６０cmのプレストレストコンクリート壁６枚を建物の外面に設置しました。これだけでは無味乾燥なので、「建築」や「科学」に関する著名な言葉を壁面に彫りこむことにしました。ルネサンスのミケランジェロの「Still I learn」ミースファンデルローエの「God is in the details」、「Less is more」などですが、ここにゲーテの「Building is frozen music」も彫り込まれています。音楽の三要素はハーモニー、リズム、メロディです。建築にもハーモニー、リズム、メロディが欲しいと思います。

最後に一言、学生時代に先輩と二人で、ジョン・コルトレーンのクワルテットを聴きに新宿にあった厚生年金ホールに行き、思い切って一番前の高価な席に座りました。会場は（裏面につづく）

（裏表紙よりつづく　趣味コラム） 物知りのお客で満員でした。ドラム、ピアノ、ベースとサックスが一緒に演奏しているのですが、ハーモニーもリズムもメロディもない、勝手に演奏しているような行き過ぎのフリージャズでした。芸術としてのジャズの行き先を悩み抜いたコルトレーンの結論だったと思います。満員の聴衆はクラシック音楽を聴くようにシーンとして聴いていました。先輩に、「ほとんどの人は理解していないと思う、懸命に拍手をしてみよう」と話しして、最も演奏が乗っている時に実行しました。会場はすごい勢いの拍手で一杯になりました。このあと、コルトレーンは若くして亡くなりました。また遡りますが、これに比べてバッハの音楽は分かりやすく、「G 線上のアリア」など誰が聞いても感動すると思います。「音楽を凍らせたと感じる建築」ですが、日本や世界の建築の意匠・構造の意味が分かりにくくなることを心配しています。何が言いたいかわからない評論家が褒めれば迎合して皆が良いと言う、そうではなく、もっと素直に理解できる建築を建てねばならないと思います。誰もが賛同する最高傑作はミースファンデルローエが設計したバルセロナ万博のドイツパビリオンです。1929 年の竣工、1986 年に再建されましたが、今でもモダンを感じる素晴らしい建築です。

日本のロケット技術の生みの親：糸川英夫は音楽活動でも有名ですが、定年後に行われたゼミで、美しいバレーやフィギュアスケートは子供からお年寄りが、何も説明を聞かなくても皆、感動する。一方、数学や理学で世界的な研究を発表した学者は、そのときに大きな話題になっても、それ以後の研究を真面目に進めているのかどうか、誰にもわからない。「サボっているように思う」と糸川先生は言われる。バレリーナが日々練習しているように、我々も日々「刻苦精励」を続けなければダメだと言われました。心に残る言葉で座右の銘にしています。（和田 章）